

# 「みどりいし」20号の 刊行に当たって

On the occasion of publishing "Midoriishi" No. 20

M. Omori

機関誌「みどりいし」第1号を刊行したのは、阿嘉島臨海研究所が開設されてから2年目の1990年9月でした。研究所の開所式に招いたカリフォルニア大学ロサンゼルス校のハムナー教授(当時)は、亜熱帯・熱帯水域の研究とスポーツダイバーの啓発のための場をつくりたいという保坂三郎氏の熱意でできたこの研究所を讃えると同時に、研究所が短命に終わらないかと心配していました。そして、米国の海洋科学の発展が多くの個人や財団の寄付によってもたらされた反面、いくつかの私立の施設が活動を途中で終えたという歴史があったことを指摘して、外部からできるだけ多くの援助と協力を受け、優秀な研究者の参加をうながすように進言してくれました(「みどりいし」1号 p.4-6)。

教授の心配が完全に払拭されたわけではありませんが、研究所は今年で21年目を迎え、「みどりいし」は20号になりました。保坂理事長の絶大な尽力は別格としても、研究所設立以来、いろいろな活動に参加していただいた多くの研究者と研究組織や企業のご協力、それに1999年以降、研究助成金を提供しておられる日本財団(笹川陽平会長)などのご支援なしには20年以上も継続できなかったかもしれないと思い、関係のかたがたにはお礼の言葉もありません。

初期にはオーストラリア国立海洋研究所のヘイワード博士とハリソン博士(何れも当時)から造礁サンゴの有性生殖に関して研究の指導を受けました。サンゴの着生・変態過程についてはカリフォルニア大学サンタバーバラ校のモース教授夫妻、遺伝・進化については国立遺伝学研究所の杉山 勉教授と服田昌之博士(何れも当時)が毎年研究に参加して、所員たちを励まして下さいました。

海から学ぶことは貴重です。水の中で刻々変化する生き物の営みを観察することは、自然科学者が研究を進めるための鍵だと思っています。阿嘉島には目と鼻の先にさんご礁があります。小さな組織ですが、このような地の利は世界の臨海研究施設の中でもそうあり

ません。

10年前の地球規模の白化現象以来、阿嘉島のさんご礁はオニヒトデの大発生もあってひどく衰退しました。程度を逸脱した人間の営みが自然に大きな脅威を与えていることは確かです。魚も減って、この間の変化は、かつての海の様子を知るものを暗澹とした気持ちにさせます。こうした中で、研究所が積み重ねてきた有性生殖を利用したさんご礁修復手法の研究の成果が出始めました。2004年からは国連GEF/世界銀行のさんご礁修復のための国際研究計画にも招かれて、パラオとフィリピンでの共同研究に参加しています。また水産庁は阿嘉島臨海研究所の技術をもとに、沖ノ鳥島産のサンゴの卵を使って阿嘉島で稚サンゴの養殖を行い、2008年には約6万株を現地の海に移植しました。

地元慶良間の人たちにも、さんご礁保全活動はようやく根付きつつあります。阿嘉島にはダイバーを収容する民宿が増え、ダイビングポートが港に並んでいます。私たちはこの間、「みどりいし」や「アムスルだより」を発行して地域の人たちに研究所の活動を知らせ、マリンスクールを開いて、海と命の大切さを子供たちに伝えてきました。

これからも、研究所を開設したときの意気込みを忘れず、さんご礁の研究と地域の振興に情熱を燃やして、「みどりいし」を長く続けてゆきたいものです。

